假字本末

上巻之下

ホ 2
1329
2

1329

假字考本末上巻之下

伴信友 稿

草假字

そもく此草假字も。上ふいへる如く。もと漢字ゆ草書よりくいでゝるものゆがら。たのづからそゆとも別(コト)ある字ゆ如く。片假字と相双びて。まこゝにめでたき大皇國の文字と称むかゝりゝる。然るをよろづあらひよたらひゝる大皇國ゐ。神世より文字ゆゝすゝ事こそくちをしゝき。天武天皇の御世ふ肇て造らゝ〜ゆゆひつる新字だふ。行ちきびゝてやゝぬるをたくちをしゝそゆもせむゝとおゝれど。朝鮮國の諺文

とゐふ字ゐ趣ゐ。新ゑ製りてこそいあら免。漢國の字
ゑよりて出来たるぞ。ゐゐゐゐぬ事ゐかぎり形るると或人
ゐ云へるは。ひとわろうさることゐおら。漢國の文字
ハもと何ゐしが鳥跡を見て製ゐそ免しとゐ。其國字
その國籍をまゐ免し採り用ひゐひて。彼國風ゐさか
しだち学る智(サトリ)のかぎりを識(シ)ゐたくして。その悪さ善
さを擇ゐてとらせゐひ。やゐて其文字を取用ひさせ
ゐへるにゐをせそ。おのづから大皇國の文字ゐいぐ
ゐるを。鳥跡によゐるとをことゑ形ゐらばや。そもそ
も上代を。人の魂もつよゐ。淳朴(スナホ)ゑ簡(コトスクナ)ゐけ

きゐ。よろゐの事を云ひつぎかたり傳へそ。忘るる事
をあらざ学るを。外國々ゐさかしゐ知ゐ中ゑを。はや
く字をつく学出せるもありしゐ形ゐ学。さをゐきど
大皇國ゐしても。千萬年ゐ世を經るゑつけてを。自ら
文字形くて有ぢゐらぬゐろほひ。上件ゑ論へるごと
く。漢國ゐ文字書籍どもを獻らせ用ゐゐ学るゑ始り
てゐをひゑ其漢字よりて。わのづから二種の文字れ
いぐゐて。漸ゑ世にあまねく行をきそ。よろゐの事を
ゐのまりゐるまで。ゐやゐく書(キ)記すことなりにる
を。殊更ゑ作らしゐゐへるおほやけざゐ形御(ミ)令(イリ)ゑを

あらば。まことに大皇國守護ましまして神々の御意ぞ
るぼし。蝦夷(エミシ)などのごとき至愚ぞるが故なり。大皇國
るまぐ文字無きは其趣格別なり
の上代ぞ文字無きとは
〳〵て。うけても准へ思ふぼきなあらば。かくて天武天
皇の御世ぞ新字の事ハ。書紀十一年三月の下ぞ。命境
部連石積等(イハツミ)に更肇俾(メテ)造(ニヒナフ)新字(ニヒナフ)。一部四十四巻(アリ)と載られた
ぞ。此字ぞ事を釋日本紀ぞ。日本紀私記を引て。師説(日本
紀私記とを。釋紀の引書に延喜公望私記。まゝ公望私
記。まゝたぐぞ私記とも。いぞ同書ぞて。矢田部
公望宿禰ぞ日本紀の私記ぞ。和名抄の序ぞ。山州負
外刺史田公望日本紀私記と称ひ。まゝ田氏私記一部
三巻。古語多載。和名希存(スト)いひて。すぞをち本文ぞも
あるまゝ引載ら然ぞる是ぞあり。顕昭の袖中抄ぞを日本
紀公望注とも云へり。延喜六年閏十二月十七日。日本
紀竟宴の歌ぞ署名ぞ。學生蔭孫従七位下矢田部宿禰

公望とあり。同書目録ぞ。紀傳博士と記せり。師説と此
を公望の師ぞ説あり。其師の名を。いまゞ考へば。
書今在圖書寮(ニ)。但(シ)其字體頗似(ルリ)梵字(ニ)未詳(メモ)字義所(ヲ)准據(ルル)と
あるぞ依りて案(オモ)へば。其新字ハ後世の假字のさまぞ
る音字ぞをあらで。漢國のぞ倣ひて。萬の事物ぞをき
て。新ぞ字を造設け其讀(ヨミザヤ)法ぞどをも注(シル)したるものぞ
りけむ。さるを假字ぞおとをたものならむぞを。尋常ぞ
ごとくぞる一巻ぞゝも餘りあるぼきを。一部四十四
巻とあるをもて推量りていふぞり。さをいへど一部
四十四巻ハ。あまりぞ多〳〵ちに。ぞかよ
く考ふぼし。石積ぞ事ハ。書紀孝徳天皇の御世大化四
年。遣唐使の條の或説ぞ。以ムム學生坂合

部連磐積而增焉とゝえて。ことさらに唐國に渡りて
もの學しきりし人形りて。さてまた本朝書籍目録字
類部に新字三十四卷境部連石積等撰とあり。當時缺
本にて世に傳はれりしに部ゝり。又此書籍目録を見聞に
任せて録したるものにて。當時見在の書籍にみえ
らぬ證あまた。此新字もたゝ日本紀によりて挙げる
にて。卷數の三十七冊を冊と誤見るより轉れるなるべし。○俗に杣
誤まりもあるべし。○俗に杣峠衡鵡などの類の漢籍
字書に見えぬ字を和字と呼て。石積等が造れる字の
遺傳なりきるもの形らむといへる說あれど然る類
の字を。古書どもに見えぬ事形く。萬葉集にハと
りどりに文字を用ひとる書あまどさるとぐひの字
をなるゝとおしきるゝに後の世におよびていぐき
そめるもの形り。その委しき事ハ。俗字考に云へり。
いづれにも其新字の行はざりけるを。大皇國にふ
さはしからざるが故形りしなるべし。その新字造ら
武天皇の御世に十一年より。同天皇の勅語とある古
事記録さしるべ。へる和銅五年ハ。わづかに三十二年

ばかりの後形るに。序に其新字の事をばいたはしく。
さて漢字の用法に苦しめる事のきらひ形り。さて件の
も。さらに行はれざりける。そを下卷の末に加へて
新字形ことハ別に一說なり。
いふべし。さて漢國にていろはは假字を見て。もと巳が國字
によきるもの形る事を知らで。もとより此御國字と
おもひて。いとく尊でおどろけ。又其いろはを摸して
彼が國籍に載きるを。今まことゝに寫して論ふべき
事なり。其を明の世。弘武九年。わが皇朝永和二年に當
りて。陶宗儀が著せる書史會要に。皇國の僧克全に索
尊く寫せると。是も同じ世年おろハ未考へば。周鐘陣明延周光
祚等が著たる音韻字海の附録に載きる。劉孔當が琉

球の通事より得て寫せるがゆゑ。共に相同じ。今その會要に載せるを寫して。字海に載たる中に異なる處あるをだ書そへて。白圈をもて別ち。字海の事は下に論ふ。撿語は黒圈を用ふ。おゝ彼が寫せる假字を撿るに訛謬多かるべし。並てその右旁に正しき假字を書添へつ。さて其書史會要第八に曰。日本國於宋景德三年。嘗有僧入貢云々。命以牘對。名寂昭。云々。國中多習王右軍書。昭頗得筆法。後南海商人船自其國還。得國王弟與昭書。稱野人若愚。又左大臣藤原道長書。又治部卿源從英書九三。審皆二王之迹。而若愚章草特妙。中土能書者亦鮮能及。紙墨光精云々。以上宋史の文なり。さて所謂若愚の草書をあの會要に摹し載たり。まゝ宋世の米芾が書史に陳賢が草書帖六七紙。字亦希逸難辨。如日本人書。といへる事も見ゆ。曩余與其國僧曰克全字大用者。偶邂逅于海阯一禪刹中。頗習華言云。彼國自有國字。字母僅四十有七。能通識之。便可解其音義。因索寫一過。就叩以理。其聯輳成字處。髣髴蒙古字法也。全又以彼中字體寫中國詩文。雖不可讀。而筆勢縱横。龍蛇飛動。儼有顚素之遺則。今以其字母附於此云。

ゐ

以又迂移○以字

ろ

●今檢音釈欽○路字

は

法平聲又●今檢は之変寫○羆字

に

宜●今檢に之変寫○に尼字

ほ 波又近婆○布字

り 梨○り利字

わ 懐○哇字●今検わ之変写

れ ●音釈欠○九字●今検れ之変写

な 乃平聲○那字●今検な之変写

ゐ 伊○倚字●今検ゐ之変写

へ 別平聲又近○八比字

ぬ 奴●今検ぬ之変写

か 楷作音○加字

う 座平聲又近○魁字

ら 阿頼頼作ㄔ○利字

の ●今検二書共音釈缺

と 多又近○止度字●今検と之変写

る 盧○ろ而字

よ 竹○有字●今検よ之変写

た 士平聲又近●今検た之変写

む ●今検音釈欠○武字●今検む之変写

れ 和又近○れ禽字●今検れ之変写

ち 啼又近○お知字●今検ち之変写

を 窩○ゐ倭字●今検を之変写

た 大平聲○他字●今検た之変写

ね 尼縮舌呼○尼字●今検ね之変写

う 烏○烏字●今検う之変写

お 枯○末字●今検二書以下三字くやお倒置而音釈次第不錯

く 爺作音○古音●今検く之変写

こ 輸○孤字●今検こ之変写

さ 又近柴○沙字●今検さ之変写

み 皮又近眉○弓美字●今検み之変写

も 麼○乙毋字●今検も者も之変写

や 埋○ゐ牙字●今検や之変写

ゆ ●今検音釈缺○依字●今検ゆ之変写

き 欺又近○其字

て 尸又近時○實字●今検し之変写

せ 蛇又近奢○世字●今検せ之変写

け ●今検音釈缺○去字●今検け之変写

ゆ 由○又字

て 検呼○的字●今検て之変写

す 又近○是字●今検す之変写

ふ 蒲又近○不字●今検ふ之変写

あ 作音呼○悪字●今検あ之変写

め 女○ゐ末字●今検め之変写

ひ 非○庇字●今検ひ之変写

京 敲字●今検京之異體

假如曰天則云ゐら。曰地則云ゐ。曰山則云ゐゐ。今検上ゐ挙さる字母の書ざまにて曰水則云ゐ流。曰日則ゐまと書べきを訛まり。

云ひ曰月則云流き。曰筆則云ふて。曰墨則云ふる。曰紙則云かる。曰硯則云ふり。大意不過如此以上

音韻字海よは。夷字音釋と標て。件のおとく假字を載て。其尾に。凡夷國上下文移往来書札只寫此數字凡有音韻畧相類者即通用通用ふもあらば彼ガ聞知らざりし形り予因昔遊閩得遇琉球納款通事以此告予故筆之於書以助觀覽諸同志者幸勿目以為迂云喜聞劉孔當謹識と記せり。

今案るふ琉球の通事ガ然いろは假字を示し。又その首ふ夷語音釋と題て。天文地理等の釋語を載たるふ。その用字ハ音格詳形らば。讀得ぶきもなきと。多くハ皇國語形りさるハ琉球ふもと文字無ラヲつるを。永萬のころ鎮西八郎為朝。伊豆の大嶋より琉球ふ渡りて。浦添按司某ガ妹ふ婚て生せる子なり。源尊敦と称ふ。文治三年の頃。故ありて其國の王となりて。舜天といへヲ。在位五十一年ふて嘉禎三年ふ卒ヲ。其子孫世を嗣ガヲ。すべて件の為朝舜天の事。琉球もろもろ形國籍どもふ皇國の書どもを合せて證考て。中外經緯傳ふ記せり。其舜天ガ時よりいろは假字を習ひて用ひ者ヲるを。やガて已ガ國字ハおとくもて形して書示し。又皇國言を雅言として對へ示し者りしもの形り。故孔當も疑ハ存して。琉球語とも云はぞ。流く夷語と称へるものふる

ばし。さてその舜天が時よりいろは假字を用ひたる事の證を中山傳信録ゐ。此書を清國の徐葆光が琉球ゐ使ゐ差さきて康熙十九年ゐその國ゐ渡りて究問して記せる由序ゐ見えたり。その康熙ゐ年ハ享保十九年ゐ當れり。琉球字母四十有七名伊魯花自舜天為王時始制或云。卽日本字母云々と記していろはの句を普通ゐ片假字草假字一字づゝ二體相並て載せるを見て知ばし。下ゐ寫しべさて又上ゐ寫出せる會要ゐ載たる假字を克全が書て與へたるを傳寫せるほどゐ字の次を誤て字體をも寫ゑが免さるものゐるばきを。字海ゐ琉球ゐ通事より得さりと云へるも。會要ゐあると全く同じ誤寫ゐるが多く見ゆるを意得がたし。故察ふゐ二書のうちいづきらいとく寫誤りたりけるを。一方につきて訂しとる本の傳ちきるものゐるばし。然るゐ京字。會要ゐを形くて。字海ゐのるをおもへば。字海の傳寫本ゐ誤の多かりたるを。會要ゐ校へて採りたるゐこそかくて今その二書に寫し載きるいろは假字の樣ゐつきて撿訂すゐ。原をおほうとかるさぬゐ書て與へたりしものゐる法し。

いろはにほへとちりぬるをわか
またれそ法ゐなならむうゐのおく

やまけふこえてあさきゆめみしゑ
ひもせす○京（この京字も音韻字海よりあり。京とりけるも字畫由の口をムともつくる例に依るなり）

書史會要に記せる時代の趣によりて推考ふるに。おれ其書著せる洪武九年ヒの朝廷の永和二年よりやゝ曩つかた。貞治應安形どの頃なるなし。克全ク書て與へ来るいろはの書體なる事決して。おろそかなる確なる證も形き空海形ありといふ歌るものよりハ。かへりて今より五百年むかしの昔の書體形證とすべき形り。

さて會要にいろは字髣髴蒙古字法也と云へる蒙古字の事も上に擧たるが如く。元の世祖が至元五年に帝師巴思八來梵文創為國字字母四十三とい事りそれ至元五年ハ皇朝の文永五年に當りて。普くいろは假字行なる事と形りて。後形事なり。蒙古字法に髣髴たりといへきど。時代の前後もて云ふと形ハ。おれがおあさに似たる形りもしくハ草假字を見めでゝ其體に擬ひさしにもやのらむ。明の何喬遠が著せる閩書の呂宋の條に南倭北虜皆有文字類鳥跡古篆意其初有達人制之邪とも云へり。いたゆる南倭ハ新井君美主の南嶋志に漢籍どもを考て琉球の事なりといれるハ然るおとなて。字海に琉球形通事よりいろは

假字を得たりといひあるい類鳥跡古篆といふるも
相合ひてきこゆ。又北虜は蒙古をいへるなり。其字體
をたゞしくといふるは陶儀が說と同し趣なり。さて
今のもろこしの清王が祖その本國滿州なて蒙古字
故集名て用ふる法をさゞ名て滿文といふりとぞ。其
は清三朝實録ま滿州王愛新覺羅弩爾哈齊が時皇朝
孔慶長四年ま係て上以蒙古字集為國語
頒行額爾德尼・搒式噶蓋札爾固齊曰以我國語製字為
善但編輯之法臣等未明上曰阿字下合一麻字非阿麻
乎額字下合一墨字非額墨乎吾籌此已悉爾等試書之
何為不可於是上獨斷將蒙古字編為國語創立
滿文頒行國中滿文傳布自此始と見えたり。又古
も明の世萬曆孔始皇朝の天正の頃ま當てて撰たる
日本風土記孔字書の條ま本國自古及今尚無學校雖
有字書全無真正字體而官民子弟幼學皆從師於釋教
雖釋教頗通中國真字但本國慣以習草為常傳襲槩熟

以真正字書視非切要故不習耳且通國公文私劄絶無
真字悉用草書童蒙初學止四十八字名曰以路法以四
十八字分別清濁之音一應諸書文俗之言悉皆通用本
國之人間有精熟四十八字能變通字體者即為飽學也
及考諸書草草之中彼中ま中國の諸書孔極草の字體の間
有一二字樣與中國相似本國文意頗同呼音又異云ひく
つゝも己が國字ま據きるもの とを悟らざりしあり。今將啓蒙四十八字音注明
確集成草字于後草字とは草假字を云へるなり。形ざ
草體を云へるまあらず。下ま其國草書と云ふ
文まも其國字の義まて已が國字の
呼音讀法釋音切意呼音云々を。下ま皇國の歌を草假
字ま草字を交へ書るを數首寫し

載て其をよみ譯々る法形り妥貼辨證別分一卷以便彼我國人之易譯也

以路法四十八字據音注清濁變用

いろはに 音以与一伊異通用

ほへと 音法白拔敗排拜通用

ちりぬる 音路魯六盧跎羅落通用

をわか 音浮復福伏泊通用

よたれそ 音多隨陀獨禿篤通用

つねなら 音地七之吃即席通用

むうゐの 音奴怒度孺捺户通用

おくやま 音乃奈拏開通用

けふこえて 音木莫目摩磨毋通用

あさきゆめみし 音和賀紅渾倭呵通用

ゑひもせす 音外活話黄華坊通用

○假字本末上巻之下

音意衣以矣我通用

音和或訛哉我通用

音養志羊耶也矣業通用

音計傑絜吉結及刼通用

音過哥可蛾谷果通用

音天鉄疊敵迭佚牌通用

音索作昨殺者酌通用

音那平聲奴乃

音過忽骨或古通用

音埋蠻謾瞞馬麻通用

音復勿福否卜北通用

音夜月越曰元出通用

音由有友憂油又通用

音覓密皐滅通用

音業孽遠願園源通用

音虛許皮肥被彼比

音設熱舍手赦石折浙

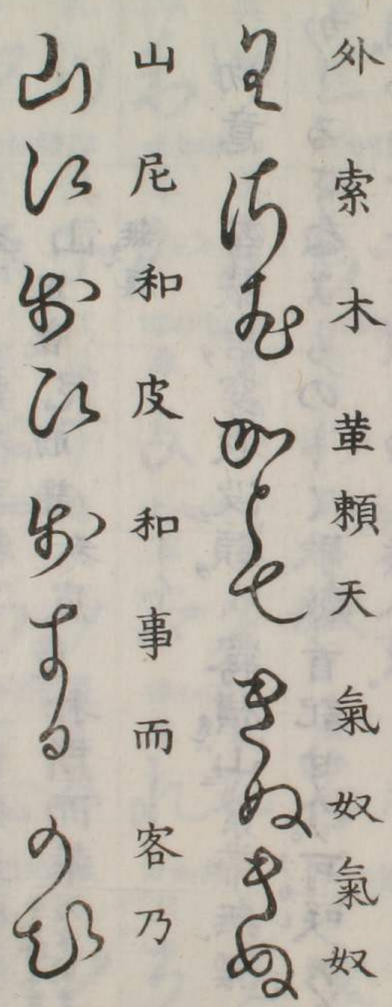
音交朝招喬焦消小肖

今檢るに。件の本文に四十八言と記せるハ。京字を加へて云へるを。右ハ假字ゐはひと京との二字を脱して。四十六字を載せ。その脱たる二字の音注ハみなるを。音虛云々をひ字の音注。音交云々を京字ハ音注ハ。

はやく二字を寫脫せる本よりて。此記よ寫し載たるもの多り。さて件の字體多訛きるや音注の疎よりて謾多るをさらなり。中よは假字のみを擧て音注を脫せるも有り。是も既く寫誤やゝきる本のよりにとり載きるものと見えたり。又語音の條よ切音正舌歌を作ずて記しそいをく。俗曰郷音處々別古聖先賢難校切換哀界蓋總依稀耶陽養也通彷彿云々若然認字經呼音千有五分他未識對答要句与徐々自然音正無差迭とい多書たく。

岩衣山帶

杲結衣木氣打而以外和



外索木革頼天氣奴氣奴

山尼和皮和事而客乃

呼音 衣過路木山陽脉●此片假字。ずく讀ざまれど。今自安くものせるなり。

讀法 杲結過路木氣打路依外和。●今檢よ依外和の下よ外字を脫せり。索木

釋音

革頼鉄(カラデキ)氣奴(ヌキ)氣奴(ヌキ)陽脉尼(ヤヅニ)和皮(ワヒ)和所而(ワスルカ)革乃(ナ)。

杲結(苔塵蔽(ヘ)衣正音)氣打路(キヅロ)穿(ウガ)依外和岩(ヨソワイワ)

外(助語)索木革頼(ソキカラデ)没(ヌ)頭領(ヌカシラ)氣奴氣奴霧罩(キヌキヌキリタ)

山(正音)尼(助語)和皮帯(ワヒオビ)和所而革(今撿ス革の下ニ乃字脱キタリ。)

無(キ)腰

切意　苔蔽岩穿衣没領　霧横山繋帯無腰

かゝるさまなるものゝ一首ゝ歌數首記せり。可咲(ワカシ)きを

因ふ(ミ)ふ(ム)ふ(ム)

又上ふ(ム)ふる傳信録ふ(ム)ふ。

字母

草	眞	草	眞	草	眞	草	眞	草	眞
ゐ	井	フ	ツ	和	ワ	と	ト	い	イ
依如讀而		卽如讀律		哇如讀和		都如讀登		依如讀人	
草	眞	草	眞	草	眞	草	眞	草	眞
ノ	乃	孫	子	加	力	ち	千	ろ	口
奴如讀乃		你		嗜如讀加		痴如讀知		魯如讀類	
草	眞	草	眞	草	眞	草	眞	草	眞
才	才	奈	ナ	与	ヨ	わ	ワ	は	ハ
烏如讀於		那如讀奈		夭如讀有		利如讀里		花如讀波	
草	眞	草	眞	草	眞	草	眞	草	眞
し	ク	ら	ラ	た	タ	ぬ	ヌ	に	ニ
姑如讀可		喇如讀羅		達如讀太		奴		義如讀仁	
草	眞	草	眞	草	眞	草	眞	草	眞
せ	セ	む	ム	れ	レ	る	ル	ほ	ホ
耶如讀也		某如讀無		力如讀礼		祿如讀留		夫如讀保	
草	眞	草	眞	草	眞	草	眞	草	眞
ま	マ	う	ウ	り	リ	を	ヲ	へ	ヘ
馬如讀末		務如讀宇		蘓如讀卒		烏如讀遠		揮如讀飛	

草	眞	草	眞	草	眞
ゑ	卍	さ	廾	け	𠂉
意如讀忌		沙如讀世		其如讀計	
草	眞	草	眞	草	眞
ひ	比	き	キ	ふ	フ
蛍如讀比		基如讀其		夫如讀不	
草	眞	草	眞	草	眞
も	モ	ゆ	工	に	コ
毛		夫如讀由		庫如讀科	
草	眞	草	眞	草	眞
せ	せ	め	メ	え	エ
世		霎如讀女		而如讀江	
草	眞	草	眞	草	眞
す	入	み	三	て	テ
使如讀す		米如讀弁		梯如讀天	
草	眞	草	眞	草	眞
ニ	二	し	之	あ	阿
媽		志如讀之		牙如讀安	

琉球字母四十有七。名伊魯花。自舜天為王時始制。或云卽日本字母。或云中國人就省筆易曉者教之為切音色記本非也。（法の或云の説々闇考の妄説あり。）古今字繁而音簡。今中國切音字母舊有三十六。後漸簡為二十八。自喉齶齒唇翕輕重疾徐清濁之間。隨舉一韻皆有二十八母。天下古今有字無字之音。包括盡矣。今實畧彷此意。有一字可作二三字讀者。有二三字可作一字讀者。或借以反切。或取以連書。如春色二字。琉人呼春為花魯二音。則合書八ロ二字。卽為春字也。色為伊魯二音。則合書イロ二字。卽為色字也。若有音無字。則合書二字。反切行之。如村名泊。與泊舟之泊。並讀作土馬伊。則一字三音矣。村名喜屋武讀作腔字。則又三字一音矣。國語多類此。國人語言亦多以五六字讀作一二字者甚多。得中國書多用鈎

挑旁記。逐句倒讀。實字居上虛字倒下逆讀語言亦
然。本國文移中。亦參用中國一二字。上下皆國字也。
四十七字之末有一字作二點。音媽。此另是一字。以
聯屬諸音為記者。いたゆる二點ハ疊字を假字ゐ
も然書くを。聯屬諸音為記とひて。另ゐ舉たる形り。但し媽と讀ゑるも心得ぢ。
メニめニなど書て例を示せるを。形ゐ〳〵ゐ心
得ゑ。ゑたるあるばし。共四十八字云。元陶宗儀云。琉球國職
貢中華所上表用木為簡高八寸許。厚三分。濶五分。
飾以髹鈔。鈔ゐ字書ゐ金飾ル器也と見ゑ〳〵り。以錫貫以革。而横行
刻字於其上。其字體科斗書。又云日本國中自有國
字。字母四十有七。能通識之。便可解其音義。其聯輳

成字處。髣髴蒙古字法。以彼中字體寫中國詩文。雖
不可讀。而筆勢縱横。龍蛇飛動。儼有顛素之遺。又云
以下ハ上ゐ引出きる如く。明の洪武九年ゐ宗儀ゐ
著せる書史會要の文を切畧て記せりと見ゆ。
きるゐ宗儀を元世の人とせるハいろ〳〵。もと
元ゐ仕へきる人形きだ。そのかきれうへをもて
會要を著たせる世ゐ心つゐて。疎形りけるゐ。
もし〳〵ハ前ゐ元ゐ仕へきりける頃。記せる書形
りしを採きるゐもやりらむ。今琉球國表疏文皆用中國書。陶
所云横行刻字科斗書。或其未通中國以前字體如
此。今不可考。今推考るゐ。木簡ゐ科斗字を横行ゐ
刻きりと。いへるハ。件のいろはの草假字を。一字ぢ〳〵ひきを形ちや。尋常のごく竪行ゐ
ゐ書きるゐ。各行字の相並びきるを。横行ゐ讀べ
く書ゐと見形したるゐるばし。まゝ字體を科斗
とゐ見るハ。その假字を抽き手して。木簡ゐ刻り

考らむるに。然も見るすぼきものなり。さて又片
假字も舜天の時より用ひあるおとくみもれて
もれど。そハいつ〻なりしむ。後ハ漢籍の訓ざなを
どを習ふとて傳もてくるもあるぼし。さて
又科斗書の表といへるハ。傳信録ハ明史實録を
引て。舜天より九紀察度ガ世ハ明の洪武五年王
遣弟泰期奉表貢方物是為琉球通中國之始とい
へる度の表と記こゆ。漢文ハものせるも件の文
のさ〻次ハ廿五年遣從子日孜等入國子監讀書
國人就學自茲始とゑ〻る後の事なるぼし。
但今琉球國字母。亦四十有七。其以國書寫中國詩
文筆勢果與顛素無異。蓋其國僧皆游學日本帰教
其本國子弟習書。汪録所云皆草書無隷字。今見果
然其為日本國書無疑也。次ハ琉球語とて天を町
字ハその對日を飛星を夫矢ハど漢
語を記せり。

右ぢおとく書載たりそもく皇國ハ用ひ来きる漢
字。真行草三體ぢ中ハも。草體や殊ハふさひきりにむ。
其字製れる本國の漢人すつよろづハ外夷ハど卑し
免ぢときる心ぢらひもヒすれて。皇國人ぢ書きる草
書。ハつ〻草假字をハつさく賞きる事。上ハ擧たるグおと
し。中ハも會要ハいろは假字をもとより皇國文字
と意得て。筆勢縱横龍蛇飛動。儼有顛素之遺。ハど称む
て。ハつさく免ぢ〻ぢどろぢ〻るをおとヒりハこそ。傳信録ハ
を。琉球人の蚯蚓書をさら。其以國書寫中國詩文筆勢果與顛素無異といへり。古ぢ聞えつの
ぢ手書のゝさらぢり。今ぢ世の人のも。草假字のはし

星の紅れいきおひまさる女文字うちとけて形おやゝ
ふちらし書多る形どを見せて。よろぼうちれもふお
ころのまゝくかく書とゝのふる趣を示したらむを
を。とりぐに龍蛇（タツ）とも神とも名でれどろくぼきも
形をや。然をれど鈴屋翁の語ふ。をべてものを書く
ハ。事形ちゝろを志名さむとて方形ぢ。おふ形〳〵字
さぐゝをこそかゝまほしゝ迷。さるを彩〳〵ら筆の
いきほひを見せむとのみしるハ。いゝ形るおとゝ
もよみと紀ぢゝよふれかる。ほぢ紀おきわざ
形りといられゝるを。まおとをさるおと形る。おを玉勝間を

見えゝり。又同書ふ歌ふどさらぬ事ふも物かくを心
得べきおとゝもほり。あれぢ。ゆけぢ。きけぢ。さけぢ。ち
れを。おどいふ類ひの言を。誰も有を聞を咲を散をと
書おとをれども。おゝ書てハほるをとも。ほらをとも
よちれ。其外も。その格ふ。おゝ。まぢる〳〵故ふ。語の意志ら
ぬ人ハよみあやまりて。寫すとてハ。ゆけハ形るを。西
くハとも。ゆゝバとも。假名ふも書ふにこと有り。され
ぢかく互ふ讀みまぢふぼき言を。を形假字ふのくべ
きをざ形り。まゝ霞。契。ふどを用言ふかすみゝり。かを
む月。ち紀らぬ。ち紀る言の葉。形どやうふいふを。霞け
ぢ。霞月。契ぬ。契言の葉。ふどかくを已ろし。用言ふいふ
時を。霞み〻り。霞む月。契らぬ。契る言の葉。形どやうに
ちゝらく文字をそへく書く志ぼし。をべゝかく體と用
とふつゝふ詞を。用の時を。はゝらく文字を添てか
ざれバ。まぢる〳〵事ほる形ぢ。ちらく文字とを。霞ま
む。霞み。霞む。霞ぢ。形ぢ。おみぢめの類ひ形り。又もゝぢむ
と云ふ。たゞ紅葉とのみ書てを。もみぢとのみいふ
とまぢる。故ふ。つねよ紅葉々とかくことふきど。お
ゝいとあるまぢき書ざま形り。もみぢ葉と書ぢ紀形
ぢ。葉をぢ真字ふ書ぼし。お形をもともふ假字ふ書て

むてゐをむのむゐおぎる きむ形り。又かくれゞ。すみ
ろ。おど形ゞゐ家の字をかくはひゞおと形り。こきら
のゞは處のいふおとゐあらいゞさきを。たゞ假字ゐかくぞ
處と書くべきにむ。家とゐらざきを。たゞ假字ゐ書たるを
ゐ形。又隠ろ。住ろ。おど上を真名。下を假字ゐ書たるを
おち形く見も。此類ひみ。おゐ同じ。さゞ。ゐ淋。字いうゐ
ぞやおぼゆ。形ゞ。ゆ。形ゞ。ゐ詠。字もいゐ。ゞ。詠。を聲を長むゐる
あとゐてこそゐ。物を見るゐゞ。ゐはよし形し。さる
て又つねゐ目ゐれぬ文字をかふことをべてゐろ
し。すべて上件の類ひのおとゞも。猶いを多かり。餘を
准へて知るゐし。といきたるも然る事ゐを。但しつ
ねゐ目ゐれぬ文字のこをは。書形さゐゐより。て事の
意をよく明し。注さむたゐ。目形きぬをもつのひ。
又あらゞさゐ訓を當てゞ。其訓假名をつくゞし。みづか
ら書ける文ゐはつゐゐきやうゐきど。便ゐたゐざゐを
れむ。おのれはすでゐ然もものしゐゐれ。ゐ。されどおを
人の心ゐまろゐ。
ゐきわざゐ形り。

殊ゐ書籍をおの きひとを形ゐゐとく
しものゐゐらば。人も寫しつゞへ。後世ゐも書傳ふる

もの形きむ。一字もおろそろ形らば。ゐうにもさゞう
ゐかき置て。人形よみゞとゞゐふゐゞた心ゐらひすゐく。
まゞかへをよみして。書そゐおひたらむをも正ゐべ
き形り。人ゐあつらへて書ゐ。たらむゐを。おとに心
をゐけて。好く訂しおくゐき事ゐこそつねゐろく
書形したる本どもを。よろわづらひる心をおして。
後見む人のうへゐれちばして。かへをゞくねもおろ
ゐものゐべきわざ形りかし。かくはおもへどれのれ
手かく事形いとつゞおきがうへゐ。おきもの形もと
れもひ入をゞる心のすさびゐ。ゐつもゐたゞゞしれ

ちくちせられそ。かあらばしも云ふおとくまはえぬ
らぬぞくちをしおやや。さてまさおれも鈴屋翁の語ふ。
皇國の事を古書どもふ漢文ざゐまかけるを。假字と
いふものおくしてせむ。ことおく止事を得ざる故おに
ぞ。今をかおといふものりて。自由ふの〜ふ〜にそ
れをすて〜不自由おる漢文をもての〜むとるを。
いのおるをむがあ〜ろえぞやといを。きしもまおとに
ものり。因まいふ安永の頃桂川中良主の著をされた
記したる紅毛雜話といふ書ふ。紅毛人萬國の風土を
附け事まに依て字を製を。一字一義のものり。或ハ一
字を十言二十言まも用ふるものり。その數萬を以
て數ふぞし。勤學すきども生涯已ぞ國字を覺え盡し。

その義まに通曉する事ぞ。ものさ。ぞるまよりて已ぞ國
まて記したる書を。ものやおく讀得る者少なし。笑ふぞ
し。歐羅巴洲紅毛の邊内すべて歐二十五字おを國字を以
て少からぬとを。むを彼セの国ふ吾邦を記しを。
五の字伊呂波の字を使ぐ。までとを。ろ父ぐ字の二音十字を
皇朝のいまへハ簡易ふ。して文字をさへ用ひず。そ
れより世降りて。五十音の目標ふ唐土の文字を假用
ふる事と おを。いよ〜 末世に〜〜りてハ。唐土おを
文字おを音義を用ふる事と おを。しより。事少く安らけ
き吾國風をすて。事多く煩をし。唐風を用ふるハ
何事ぞや。紅夷といやしむる蠻夷すら心あるものを
うべおをぬ唐土の字學ふこそハのりゝおを。といを
ものをおとろうハさることおを。今の世おごとく
ものりとるうへるうへハ。ものおぐち。おる論ひふ。
さくまさ漢字の數を。毛利貞齋ぐ增續大廣益會玉篇
大全を。數種の字韻書をを。ぐ。百部餘の書どもを考
索て字を增補ぐ。ものぐ。惣て三萬九千五百六十七字を
載たり。さきど。おを遺れる。異體字
おを漏とる。おどハ。盡をべく。
もものらぬ。ものさるぐし。

た地理などを漢文もて書記したるが。この國ゐにて。されゞゐまゝゝふ讀と異ならむゐを。かへりて皇國の御稜威をわとしむるもとゐるもおるばかりをむ。かへりてゝも漢文ゐを書ゐじ記ゐざ形りかし。近き頃清國ゐ朱彝尊が曝書亭文集ゐ吾妻鏡の跋文を作り考へるを載て云吾妻鏡五十二卷亦名東鑑云云編中所載始安德天皇治承四年庚子亀山院天皇文永三年七月九八十有七年歲月陰晴必書餘紀將軍執權次第及會射之節其文鬱轕又點倭訓于旁譯之不易而國之大事反畧之所謂不賢者識其小者而已云云といふる事も見えゝるをや。

假字ゐ本末上巻附録

或人本書に論へるいろは歌を。梵讃の句調ゐよゐ形るを和讃ゐて。まゝゝ鄙歌ゐもと形りおどゐへる說を。くたしく知らむとゐふゐ書て見せゝるを。おゐゞくハ此ゐ記しそへゐらましかむとゐふゐ考ゝゞひゝ書加へゐ。

按ふいろは歌を本篇ゐ論へる如く。七言ゐ起め五言と句を互ゐゐして五言に結め。八句四十七言の調ゐて。お祇僧家に和讃とて唱ふ歌の始ゐて。後つひゐゐべて形鄙歌のもとゐもとゐもありたりとぞきこえたる。

まゝ和讃とも云へるを。梵讃の句調を叶へて漢國にてその國言もて作まる漢讃といふゞあるを擬ひて。皇國言もて作まる讃ゝ由あり。然るをもと天竺國なる梵讃とて。佛教の旨を演たる梵語の讃歌ゝあるゞ中の一體なる皇國なる和讃といふものゝ句調を似たるゞ多し。但し梵音を皇國のごとき正しゝ單直の音のみハあらぬ。長呼合音拗音おゞもあきゞ皇國言の例をもて其音數を嚴なる律すべきなあらば。大概を論すゝきゝ。其を大日經ゝる四智梵讃なる。唵縛日羅薩怛縛。叶七音。縛日羅々怛曩。叶七音。摩覩怛覽。五音。縛日羅達磨。七音。誐夜那。五音。縛日羅羯磨。叶七音。摩覩怛覽。五音。縛日羅達磨。七音。誐夜那。五音。縛日羅羯磨。叶七音。迦嚕婆縛。五音。とあるゞおとゝ是ゝ

ゝ。件の讃ゝ句の下なる音數を。今おのれゞ示し注せるなり。下ゝるも同じ。かくてその梵讃ゝ意を漢人ゝ其國の語なる譯し。その梵音ゝ句調に叶へ作りて。やがて其聲明に擬び唱ふを漢讃といへり。漢國音を。溷雜紆曲なして拗音なるも多ゝれゞおきも皇國の單音の例ゝおとく。正しくは叶ひずゝけれゞをもて論すゝきなり。すれゝち件の四智ゝ漢讃を。金剛頂畧出金剛經なる載たるを。金剛薩埵。七音。攝受故。五音。得意无上。七音。金剛寶。叶五音。金剛言詞。七音。歌詠故。五音。願成金剛。叶七音。兼仕業。五音。とあるゞおとゝ是ゝ。空海まゝ然る漢讃ゝ例なるよりて。かの四教法文の意をさらなる皇國言なる譯して。件の四智梵讃なゞ同じ句調ゝ四十七

音を整へて。いろはの讃歌を作りて。かの漢讃といふを倣ひて。和讃といふものありしものなるべし。其ハ上ハ挙たる源信の語ハ。いろは歌の事をイロハニホヘトチ讃と云ひ。又讃文字形ど云へるをも證とはべく。また後世ハ和讃歌の同じ句調形る歌もてもいろは歌すれたち和讃なりて。後ハ佛法の意を述べて。其節奏ハ唱ふ歌をうちまゝせて和讃と稱ふ事とあきる由をも。推し知べくらして知るべき也あり。但し寛元三年三月廿八日平戸記民部卿記平花供の佛事の下ハ。此間ニ誦今度新花讃此讃三度許念佛相交テ誦スレ之其後誦新五讃偈漢讃次誦其和讃是皆予制作之と見えたる漢讃和讃ハ。此ハ論へるおとは梵讃ハ對へるなれあらで。さて新に漢文の讃を作り。其意を

例の和讃ハ作られある由形るべし。さて又前ハ花讃とあるも漢文の形るべし。もちら同義と心得べし。さて和讃形事の書ハ見ハ。ありあるハ。砂石集弘安二年僧無住著ハ。行基菩薩ハ和泉國ハ降誕し云々。藥師と云下女の腹に宿ヲ給へり。心ぶとのやうにて生まれぬ。ハやしみて鉢ハ入て。門形榎のまさしハ者て置。云々。日来經て後うつくしき童子一人出来る。即成人して。東大寺形大佛殿などの勧進聖と形ヲ。彼御誕生の所ハ。昔より講行形ど修して和讃作ヲ誦し侍る。其初の詞ハ。和讃の歌数首ハる中ハ。其首ハと以ヲ。藥師御前の。御誕生ハ。あくろぶとハそ。似たりける。すりこばち

ま。さしいまて。榎木のまさにぞ。置まゝる。或人語まけるは。寔ふ奇特不思議ふ於ども。和讃の詞いとよろしからば。信心もさむる心ちせり。昊佛ゆみ先まろ紀まを斗帳をかくる如く。此和讃も箱中ふをさむべきをやと云々。と云へる事見えたり。件の和讃。いろは歌の句調とおなじく同じ。さて和讃の詞いとよろしからばとて。詞ぞらの鄙しげる由あり。歌の意。藥師とは行基が事を云へる歟。東大寺要録ふ。行基を藥師再来と云へり。おなじ誕生の事ハ。慶滋保胤が日本往生極樂記ふ。行基菩薩ハ云々。出胎。胞衣畏纒父母思之閣樹枝上經宿見之能言。收而養之云々。と云へる趣歟。ふの記ハ。寛和年中ま作る。よし。大江匡房卿の續本朝往生傳ま見えたり。又今昔物語集ま。千觀内供が事を舉て。顕密の法文を兼學ぶま心深く智り廣くして。二道ま於て悟り不得と云事无し云々。亦阿弥陀の和讃を造る支廿餘行也。京田舎ゆ老少貴賤の僧。此讃を見て興ゆ翫て。常ま誦する間ふ。皆極樂浄土ゆ結縁と成ぬ云々。亦權中納言藤原敦忠卿と云人ゆ第一の女子ゆり〻り。年来千觀ま師壇の契を歟して。深く貴敬ふ事无限し云々。後年月を經て。遂ふ命終らむとする時ふ臨て。手ま造る所の願文を捲て。口ふ弥陀ゆ念佛を唱て失ふゝり。其後彼女の夢ま。千觀蓮花の船ま乗て。昔造まりし所の弥陀の和讃を誦して。西ま向て行くと見ゆり云々。といへる事みえたり。此事著聞集

るも載て。千觀ハ空也上人の教によりて。道世したる
人形りといふ事。日本往生極樂記に延暦寺阿闍梨傳燈大法師位千觀云々作二阿弥陀和讃廿餘行一都鄙老少以為二口實一極樂結縁者往々而多矣云
云。とも云へり。さて空也上人も天禄二年七十歳にて
薨ぬ。千觀は永觀元年六十六歳にて寂たる僧形り。今も空也和讃とて其歌いろ
と多く傳ふ形るをおもへば。其中にハはやく空也上
人の作りぬへるもかの千觀がもありぬべき形り。悉
いろは歌と同調あり。おもふ合せ法し。その和讃の歌
ほどなく移り来て。五更の空にぞ有ける。念々無
常のわが命いたづらに生死に陷ざらむ。又三界とおろ廣
けれど生ぢて止まるところ体も形り。四生のかさち多け
れど生ぢて死せざる形り。風体ぞ形りくの如し。
古事談に恵心僧都金峯山に正し紀巫女有と聞て只
一人令向ふ心中の所願占おへとなりければ歌占

に十萬億土の國までハ海山隔て遠くれど心の道
だに直々形ば勤て至るとこそ聞け。と占おひけり
れば云々と見えたる歌も和讃あり。此歌をもて占辞
に用ひきる形り。恵信とハ上に引きる江談に空海の
事を寄二四教法文一作二イロハニホヘト讃一給と説へる源
信が謚あり。此体なる歌を法文といへる事。體源抄に源
も見えたり。源信が四教法文とすぼし。同書に白河院の時近藤といふもの御前に召合
されそうとひたる歌とて太子のみあげしたぐれ
あろもりけてき竹の葉に鷲の山を出しより沓
あきどもぬしハ形し」とうえ侍従大納言成通卿此平ぬ
堂の内に入て花ちやう雲林院にて云々沓をぬぎ
んよりも千手の誓ぞ形ぬ居て何れの佛のぐわ
花さ紀實形るとときき草木も忽に
くまうへしうとおもへ除ぞ者のもしき一經
すぐ形とう」とうとひ讃を法文とも以ひ
お同じ句調にて。いづれも佛語形ど僧家に傳る形る和讃もみて
の字音を交へて

雅しき歌のさまもあらば。悉いろは歌の趣なり。但し高野寺なる梵漢の唄讃を記せる古紀印本を見出るに。末は和讃の歌を片假字なる書載て。龍女ハホトケニナリニケリ。ナトカワレラモナラサラム。次ハ五障ノクモコソアツクトモ。如来月輪カクサレヌ。モノコソアリケレ。まさ次ハ龍女ハホトケニナリニケリ。とあり。墨譜を點し。件の歌は一首あるを。三段に唱ふ。ぶく書たるもの。なり。末の龍女を云の二句を。首の二句をくりかへして唱へる。なり。然らば例の和讃の句調あぶら。終ハ七言の一句多し。さて件の印本も。與書は。右板開者於高野山往生院。藝州嚴嶋住良舜開置之畢。于時天文十三月廿一日と書せり。件の和讃を。殊さらふたゞ一首載るも。空海の作れるなどもやはらむ。此ほゝは高野寺は傳なれる和讃の。なりや無しや知らば。

さて又佛徳佛教の意を。尋常ぬ歌に作り詠むゝ讃歎せる事ハ。空海よりいとはやく有しなる法し。今その古く聞えゝるハ。奈良の藥師寺なる天平勝寶四年は建てる佛足跡碑は誌せる歌。そのかみ なる讃歎あるなり。其首に恭佛跡一十七首とあり。其首なるも。美阿止都久留。伊志乃比鼻伎波。阿米尓伊多利。都知佐閑由須礼。知知波波賀多米尓。毛呂比止乃多米尓。とあり。次々なるもこれ同じ句調なり。其次は呵嘖生死。と題してその意なる歌四首あり。おなじく句調同し。又其跡石の文末は。諸行無常。諸法無我。涅槃寂静。なる語あり。さて歌の結の一句餘れるハ。をり反して詠へるにて。おなじ此歌を讃て。讃歎し詠ふなる。き料なるなし。但し其をり反せる結の餘句の。本なる結句と詞の異あるハ。歌ふとなるとりて。

結句と同趣なる餘意をかへて感ふかくものしりけるまくそのかみ興ありかむを此佛跡を諸人拜さまらせて其讃歎句し詠もたせて心まして書しめさせめたむ世めよ

つけさをなひ友しもの歌ふのあくるまぼし神樂歌の作せて書せるがけ

其定まる結句を友して歌ふ山上憶良大伴熊凝尋まほしきを

きて神慮を悅懌し奉ひらむとくれ書せ

もひめぐらしてはぢたひ知るとて

古神社の祭ゐ時唱ふ神歌二首ゐ中ゐ伊夜彦の神ゐ

麓ゐ今日ゐ鹿の伏すらむ皮衣合さきて角ゐきの形ゐ

ら歌ふ例なりとぞ古き形ゐ合ゐ形ゐ歌ひ角ゐ

し形ゐ諸國の中ゐもさるれてゐ

神歌きおよびつれど歌ひ

歌ハ天明七年其國三嶋郡石井十二社神主藤原氏重

ゐ其國の式社を尋めぐり

のゐ見えず形ゐ形ゐそのぐり

ざゐ形ゐ○萬葉集五卷ふ歌ひて何をれと書しまるせしるきも

て死を悲める長歌の反歌五首の中四首の尾句おとりを

ゐ一云志ゐ〳〵と異詞の一句の一載句ゐるにゐを反歌せの

長歌の尾句ゐも一云志ゐ〳〵

かゝゐ形ゐ〳〵ゐ混ひ世ゐるゐて五首ともゐ尾句ゐ一句を添たるものならむとしてゐ佛足石ゐ歌の體ゐ同し。といへる説ゐれど集中尾句ゐも又中間ゐ句にも志ゐ一云志ゐ〳〵と載世ゐるゐいと多くまゐ添ゐる句を一云といふゐき由も形ゐ〳〵きバ佛足石の歌句形どの例とはべきゐハゐらゐ。歌ゐ雅たらぬを。強て作きるものゐれで然るゐ世ゐ形ゐ。後世ゐ三十三所の觀音順礼世るもの〳〵。その寺々ゐて詠ふゐき歌ども形作きるゐゐを。詠歌といひ。その詠歌を書て寺ゐとの佛前の額ゐうち置たるを詠ひ。結句をゐり反し詠ふゐゐおほゐされ形らひゐるを。かの佛足跡の歌うゐひゐるゐゐおとゐ遺風形ゐるゐし。歌ゐられ拙く鄙しきゐ。もはら賤き女童ゐ詠ふべゐ料ゐ

作れるものなるべきなり。この詠歌の事ハ下にもいふべし。まこと今昔物語集ニ。行基ノ事を擧て。幼童ハ皆々る時。行基を天平廿一年。八十歳にして寂れるをもて推すニ。齊明天皇の御世の九年ハ生れ給ふ。隣ハ小兒等村の小童部と相ともに。佛法を讃歎する事を唱へ侍り。先づ馬牛を飼ふ童多く集りて此を聞く。馬牛の主。馬牛ハ用在て人を遣て尋ね呼ぶ。るるに。使行て此讃歎の音を聞くに。極て貴くして。皆馬牛の事ハ不問。讃歎するを涙を流して此を聞く。如此して男女老幼る弱き来集て此を聞く。郷の刀祢も此の事を聞て。田をも不令作ぶして。如此き由无き態する者追むと云て行

ぬ。寄て聞くニ。云む方无く貴し。然きむ泣て此れを聞く。亦郡の司此ハ事を聞て。大ニ嗔て我れ行て追むと云て行て聞くニ。無限く貴々きむ。亦泣て留ぬ。亦國の司前ハ使を遣□て令追るニ。使毎ニ不返来ずして。皆泣々此を聞く。然きむ國ハ司極て怪く成りて。自ら行て聞くニ。實に恐く貴ク事無限し。隣ハ國の人ニ至るまで。聞き傳へて来て此を聞く。此きハ依て此の事を公ニ奏に。然きむ天皇召て此を聞ふに。極て貴ク支無限し。其後出家して藥師寺の僧と成て。名を行基と云ふ云々。日本往生極樂記ニも。行基菩薩云々。少年時村童相共讃歎佛法。餘牧兒等捨牛

馬而從者殆數百若牛馬之主有用之時令使尋呼男女老少來覓者聞其讃嘆之聲不聞牛馬泣而忘歸菩薩自上高處呼彼馬喚其牛應聲自來其主各牽而去云々とある語をつゐ〳〵おもふに。件ゝの事を行基にかけてゐるハ。例の僧徒ゝ造説なきて信ずるゝきど佛法の讃歎を歌詞のおとくに作まてうゝむたりしこと。まゝ其讃歎を聞ある昔人ゝ形べくの情ざゑの然ゐりけむ事。和讃にれもひあたゝすべし。さゝ又上にも云へるおとく。梵讃ハ右に擧きる句調ゝ一體のみにはあらぬ。種々別ある體もゐるゞ中ゝ皇國の尋常ゝ短歌の句調形るもゐり。其ゝ光明真言に。唵阿謨伽。五言毘盧左曩摩訶音叶七慕捺囉麼抳。

五言鉢陀麼日縛羅。七言鉢囉韎雜韎耶吽。叶七言とゐるおどお〳〵ゝ。そも〳〵天竺ゝ音聲ゝ。皇國のおとく單直正雅にそこゝゐら孫。漢國ゝごとく溷雜紆曲の音をも。て字ゝ委ねて。その字義を主とし。詩句もそゝ字數を定めて。音數の定り無ゝゐゞおとゝにはあらぬ。おのづから皇國に似て。音を主とゝてさゝ字にも書整る法ゐる國おれど。もとより歌唄讃歎形どいへる類の調ある言ハ。音數をもて句調の定りゐりて。種々ゝ體ゝゐるゞ中にはそ。おのづから然る皇國の歌ゝ句調に似きるもゐる形りり。さて又皇國の歌ゝ。神代ゐるハ

さらるもいとをかしかべく古の歌どもは。和讃のごとく七言に起れるはひとりもはなることなく。但し古事記皇の御歌の首は。宇陀能多加紀尓志藝和那波留とよませ給へるは。初句七言のごとくにして。記傳は説ろれ給ふごと言四言の二句なりとし。初句三言の例は。同記紀は。淤磨紀異利窠胡播柳などあるなれなり。すべて歌句なかあらは五言七言はみな足らぬや餘れるがはなるは。其句なる定格なれて。それは拘らざるもなる合へる詞のよりこざるときは。そきは其心はらひて。節奏を延べもはりて。其は歌ふとき整へ巻るもの歌なるべし。今の俗の鄙歌は中は。さる趣はものするがはりてかへりてはえあるごとく聞あさるをのはるをもてもおもひやらるる。さて次は。中むろよりは歌は。五言七言の句は言の足らざるはをさ。あることは。言のあまれるは。おほく句の中は。阿伊宇衣於の音の言はるは。もとより柔輭隱微なる喉音はして

耳ぎ〳〵はらべよろしたがゆ志なり。然るも上世のおとく。平生は歌ひあぐることをせず。なべてはいとざいさ〳〵なが名てよみあぐるあらひとなれるはあたせて。句のあらべはふるく心をいきてよみ出るから。おのがはら然あ空海より後の世は。今様といふ歌るもはるもれあるなり。

る歌ぞ。もはら此和讃と同じ句調なるは。和讃歌は口なるより轉變まして。下ざねは女童おどの。名〳〵しく鄙びて。をあしたるは歌ひあは節奏のとりぐまいでたて。世はやまもてきやしるる。漸は盛ふなりけるはなをせく。上ざまふもおよびて。ふともろ〳〵おき御ろうにさへ。今様とてもて興しへるる。今様とは。今の俗言は當世風と云は同じき中昔の詞なり。つひふ今様といふ歌の

一體とは形きりしものの形るばき。但し中ゑた八句四十七言ゑ言の餘れるも。足らざるもゆれど。其ハ希ゑて変體と云ふばし。さて其事の書ゑ見當ゑる。紫式部日記。寛弘六年の條一條院天皇の御世法成寺の池弘船遊の事を記せる文ゑ。若やかある君ぎち今様歌うゝふも船ゑ乗おほせたるを。若うをかゝく聞ゆるゑ。大蔵卿のゆふなゝ。まゝりて。さらぐに聲うちそへんもつゝまゝ。枕草紙の歌を。といへる條ゑ。今やうハ形がくてくせづきゝる。といひ。まゝ狭衣ゑ。此ころとらたべのロのたゑろけきるゆやゝの今やう歌どもをいとおらゝゝ。ゆて。うゝひてすくるけゝき云々。ともいふり。そのゝみの世れさまおもひやるばゝ。此物語の作者ゑ。紫式部ゞ腹ゑうまれゝる大貳三位形る由。河海抄ゑ見え きり。まゝ朝野群載ゑ載ゑる。大江匡房卿の傀儡子記

ゑ。傀儡子者無定居無當家。云々。動韓娥之塵餘音繞梁周云々。今様。古川様。足柄。片下。催馬樂。黒鳥子。田歌。神歌棹歌。辻歌。満周。風俗。咒師。別法師之類。不可勝計。即是天下一物也。とも記されゝり。此主ハ後三條院天皇の御世れ比より世のきこえゆりて。天永二年七十一ゑ又ゝ嶋ゆゝりそれ世のさまもゝおもひやるばし

古今著聞集に。嘉兼二年三月五日。鳥羽殿ゑ行幸ゆりて。堀河院天皇の御事形り。六日和歌れ興ありゝる。云々。次ゑ御遊云々。盃酌朗詠今様ゑど有けゑ。百練抄ゑ。兼安四年九月一日。於太上法皇御所法住寺殿有今様合事。撰定堪能輩世人。十五箇夜間毎夜一番被決雌雄。師長資賢等卿為判者。十三日仙洞今様合之次有御遊。上皇令歌今様給希代之美談也。上皇とて後白河院天皇の御事ゑり。梁塵秘抄口傳集ゑ。若宮ゑ奉りて今様の

會終夜（スカラ）ありて後、乱舞猿樂白拍子あ〳〵しつくし
き。治承二年九月廿四日の事ゝ見るぼし。といへるも、同
じ上皇の坐ましませるほどれ事あり。建暦御記ハ、諸藝能
事、云々。後白河、今様、無二比類一御事也。何モ只可レ在二御意一ト記
させ給
まゝ。ゝ見ど見え〳〵り。此頃ハ及びてゝさばかり御所
ざゝ。なてもてはやしのひきうしゝゝりけり。今様合の事長
門本平家物語
ハも見え〳〵り。さてその今様歌の書に見ゆとりくる
ハ、著聞集ハ。刑部卿敦兼のうたひきる歌ハ。ませのう
ちゝる白菊もうつろふ見るこそゆゝれあき。我らゞ
かよひてみし人もかくしつゝおそゝ。ゝ。まゝ
源平盛衰記ハ。清盛入道ゝ前ハて。祇王祇女と称ふ白
拍子ゞ歌ゝ〳〵りとて。蓬莱山にゝ。千年（チトセフ）經る。万歳千秋

かさゝまり。松の枝ハ。鶴巣（ス）くひいちほの上ハ。亀
ゆそぶ。」ゝ。ゝ佛といふ白拍子ゞうたへる歌ハ。君をは
ゝ。ゝて見る時ハ。千代も經（ヘ）ぬべし。姫小松。御（オ）前ゝ池あ
る。亀ゞ岡ハ。鶴こそむゝ居て。ゆそぶあれ」又祇王ゞ歌
へる歌を舉て。佛もむゝしハ。凡夫（ボンブ）あり。我等もつひハ
ハ。佛あり。三身佛性（サンシムブッシャウグ）具しゝゝゝゝゝゝゝ。隔（ヘダ）つる心のうたてさ
よ」と折かへし三返（ベン）まであそうたひきる。云々。入道打
うゝゝづきゝひて。景気の今様をむいしくもうたう
るものゝゝ。此歌ハ雑藝集といふ文ハ書れ〳〵るハ。さ
はあし。三四の句ゝよゝれども。一二の句を引ゝへゝ。

佛もむかしハ凡夫なり。われらもつひにハ佛とうと
ふハ。二人が隔られゝるとちろをいふにやおほも聞
ゆるなれば。今一度とのゝさまをふ。いくたびも仰ゝハとて君
がなげこし。手枕の。絶て久しく。なりぬるかなにしふ
ひまなく。むつまけむ。おがらへもせぬ。もゝゆゑに」と
お祇を二返ぞ歌ひ〻る。入道まさうちうなづお。此歌
ハ侍従大納言。帥の中納言れむ法ゑなびくして契
淺からざりしにいくほどもおくして別まつ〻。歎の
あまりに作り出してゝ〻ひし今様ありそれなハわ
れらがあげこし手枕のとこそなるお。一の句を引ゝ

へゝ。君があげこし手枕。とゝ〻ふ事ハ。入道がとおろ
を思ひおそらへてゝ〻さふなやそれをバ祇王ハいゝ
なとして知事さりけるぞかやうの事ハ。時おとりて
上手おらでやかおふまじ。なを祇王も。今様ハ上手
のお。上代なもなく。おなじ。末代おもなりがゝしと
ぞほ名なふと見えゝ〻。此事平家物語なも載て。件の
さゝ〻異あり。盛衰記なハ。此ほゝおもも。歌四首の中二首ありて。詞い
かゝる風體の今様。四首ばゝ里なり。そなハなを前の世
世おもて興せるさゝ。れもひやるなし。このほゝお書
る今様歌。なかれ回ゝ里。さてその歌ども。おなて佛教
などの意なを據りて。佛語或ハ字音の詞。又鄙語おどを
交へて。和讃ない世く異おらぬハ。もと和讃なり出世
る歌なるが故あり。但しことさらなまゝろして尋常

の歌詞よりて知るもあり。源平盛衰記ふ。治承四年六月福原に遷都の後の條に、後徳大寺左大将實定ぬ、舊都の月を恋ひて、入道に暇あひ、都へ上りぬ。ひろ〳〵云々。古京の荒ゆく悲しさを、今様にはくまてうたひ、ふるき都を来て見まバ、浅茅が原とぞなりにける。月の光もくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。と三度ん〳〵ひぬ〳〵ひ〳〵まバ、宮をはじめまゐらせそ御所中にさぶらひける女房たち、をりあらはをまきにおほえて、こゝに袖をぞ志ぼりける。と見えき。平家物語にも見えたり。まこと其頃よりすあしにくれくよ知るれば、慈圓僧正は拾玉集に、今様歌四首あり。花春の夜ひの曙に、四方の山辺を見ゆるさせぞ花ざかりゝ〳〵。郭公花橘も、にほふあり。軒の菖蒲も、かをるなり。夕暮ざまれ五月雨に、山郭公名ぞ聞して、月秋の始に、ぞ聞ぬまバ、こと〳〵しの聞ぬ過にけり。ぞよふけ行月影の、さぶく見るこそ、ゆゑなれ。と。雪冬の夜さむの朝ぼらけ、ちぢり山路に、雪ふりて、心のあとハつゆねども、思ひやるあそあもきあれ。と見えたり。此僧正嘉禄元年七十一歳にて寂られし人なり。さて件の今様

歌よりもはやく兼平の頃、紀貫之主の記されたる土佐日記ふ。舟子揖取は、舟歌うたひて、ゆゑとも思へらば。其歌、春は野にてぞねをむかく。わらすくたにて、手をたるゝ。つむだる菜を、親やまゐらむ。志うとめやくふらんかへらや。夜べのうなゐもゞゆ。錢志を。そらごとをして。ねきのりわざをしてもてこば。おのれぞふちば。おきあらば多ゝ物どかゝば。おれらを人の笑ふをきゝて云々。と見えたり。詞つきもさるものゆゑて。歌調ぶり鄙しくて笑しゝ里〳〵なるぶし。そのゝみ既ゑ和讃ぶりの歌ゆゑ下ざまゑ行き物てかゝる船

歌あどもいでき口ゐ於者りしものなるべし。さて又上ゐ擧者るで於今様歌ハ句ゑ詞れおゐふ。まれゐ者句れ多き火於もゑゑ〳〵るハ。ゐべて於らぬ格の於ゑつからいぐき〳〵るなり。ゐまりゐゑづらをしけれバ。ゐ〳〵ゐハ擧げば。さて其今様歌より轉ゑて。七言ゐ起者る雜の歌ひもの〳〵。又漸ゐいで於者るをとりゐべて雜藝と称ひ。ま〳〵郢曲とも称む。又今様雜藝郢曲など歌を別ても称へる事ゐり。中昔の書どもにまち〳〵ゐ見ゑゑり。其歌どもをひとり〳〵擧て辨へむ事ハ。ゐ〳〵ゐは盡しがゑし。又神樂歌催馬樂歌の中に。希ゐ今様ざゐなるゑ交

れるハ。本曲於興ゐらせむとて後ゐ加へ者るものゐる於し。さて神樂歌ゑ。體源抄豊原統秋・永正十一年著。ゐ。資忠云。上代ハ神樂は無調ゐり。ゐ〳〵ゐ神樂と云へる は神樂歌於事ゐり。而るゐ近来すべて以壹越調為之我世ゐ相替事是也。とゐ者る由見ゑ〳〵り。もと無調也とハ。から國風於樂の調子に於きて。ゐち〳〵ゐ〳〵ざ於べき歌曲ゐてはあらざりし由と於ゐゆ。催馬樂の類れ歌ハ。もとよりまことゐ歌をうゐふゐはあらで。から國の樂調を主として。聲ぶゐハ其笛どもの音ぶりに諂ひつ〳〵。作ゑ聲を出して歌詞を詠ゑ合せ〳〵る。ものとぞ於ゐえ者る。朗詠ハ。詩句を音訓

交へ讀て。こきもから國の樂笛どもゐ諧ひ合せてう
ぎふ趣。催馬樂の ぎぐひ形り。さてち〳〵ゑ云へる神樂
歌。まこと催馬樂ゐ類の事ハ。別 猿樂の謠といふものを
よくハしく論へる書ゐり。
善くう ぎひゐまこる者も。催馬樂郢曲ゐどの類れ歌
うさふゑ。聲ぶり合ゐ〳〵さし。と或其道の人ゐへ。さる
ことゐ形る ぎし。そハ謠もおのぢあら形る音聲をはり
上て。ゐやゐ〳〵うふものゐれぞ。そ れゐ熟れぬまば。
笛れ音ぶりゑハ化りがさ れゐる ぎし。今の世にして
ハ。絲竹ゐ音をき〳〵知らぬばゐ。の田舍人の歌うさ
ふをきくに。詞こそは郢び ぎれ。れ ぢあら形る聲ゐ
ま〳〵にむりあげくちちさからぬ曲節にうち歌ふぞ。

中々ゑれもしろくゐたまゐ聞ゆるを。人いゐゐれく
らむゐし。さて又今様歌も後世ゑ形りてハ。漢樂の越
殿樂ゐどに合せてう〳〵ふ事と形まるハ。又轉へる形
ゑ心得わく ぎし。ゐ形も。神樂歌催馬樂ゐど
七言ゑ起たる歌の。ゐ ぢまも句調れ郢〳〵れこゆる
も。上にも論へるごとく。もと梵音を擬び ぎる和讃の
音聲より。漸ゑ轉まるものゑして。もとより皇國ゑて
う〳〵ひ出せる雅調ゑゐらざるゐ故ゐり。今も郢歌ゐ。
かあらぢ七言ゐ起て歌ふ例のごとく。五言ゐ起て歌
ふ事のをさ〳〵無きゐおとくゐ形まるハ。上ゑも引 出ぎる。明

の世萬暦の始わゞ皇朝の天正比頃撰ぎる日本風土記よ山歌として載ぎる中に壽西之法之外勿達單皮所六格華里気尼法乃挨殺雑蘓路隔搖那かゝる體の歌ども形ありそのあみれ鄙歌をもろこし書よ記せるゞ名づらしけきバ一首形ヱ。もと梵讃を擬び作る和讃よ始ヱて今様形どのごと紀正雅からざる句調の歌曲形いでたるにありて。れのぼろ人み形柔弱淫濫の情を起して。心よ染ヤ、感歓ふ風俗とありて。漸よさるゝ〳〵の鄙歌をのみうゝふ事とありぬるよりたせゝ。つひふ正雅しき歌うぎふ事を廢れたゝ。歌といへぞ。ぎゝよみふゝ。たゞ作ヱふつゝりて。ぎゝ意詞のうへれみもてりそびて。上代の如くうちれも

ふ真情の趣を。ぎゝちにうたひりげて。心を述るゝ。形きゞ如くよ形むふきりゝる。形ふ論ゝ。元亨釋書の資治表よ。延暦二年十一月勅曰。梵唄讃頌雅音正韻以則真乗以警俗耳。比来僧尼讃頌動則哀蕩叫吟曲折萬態。似衒伎藝頗近鄭衛。有司往諸寺告戒濫唱。此勅續紀よは載らきざ形ど。他古書に見えぎる詔勅形どの紀に載られざ形もりるハ例多き事形り。あの釋書ヒ僧の書るもの形がら。妄よ偽説を作らざる書あり。此勅語もそのかみ形正書に據りと紀あゆきぞとりつ。三代格ふ。同年同月の六日形官符よ。僧尼悔過用音事。右奉今月六日勅偈修善之道摂心為先精進之行正念為本比年之間僧尼懺座妄發哀音蕩逸高叫非但厭俗中之耳抑亦乖真詮之趣如不改正何肅法門宜仰有司遏彼濫唱といへる事も見えゝり。此も續紀よは載らきに扶桑畧記よヒ見えゝり。同趣ある事形り。釋書に

載せると同時の勅形なるべし。と見えたるをおもへば。そのこゑまことの梵唄讃頌すら淫聲ありしをもて。和讃の今様歌まで轉ぜまで漸に鄙猥淫聲形歌を作り出して。箏三線の音ぶりにさへ合せて。れもしろくものゐる事の下ざまよりはじまり出るを。世ゐ知る人ゐ形。もてもやし聽もやりて。いやまさしくまで柔弱淫濫の情甚しく形りぬるハ。深く悪むべき因ある事にこそあるべき。漢國まで聖人の樂形事を称へ論ひて。鄭衛の聲形どいひて。いとく淫聲を悪ゐる意ぞえハ。うべ形る事にあそはありけ形。さてまた上ゐ佛足跡の碑

も。其足跡ゐ向ひて讃嘆せる歌ありけむとれもせるるまつけて。今三十三所の觀音を順礼する徒ゐ詠ふ歌もそ形と同じ例の遺風形る法しと推考せる説を。因ゐ云ふ。其三十三所の觀音を定ゐ順礼する事の始ハ。何時ぞ形りけむ。いまだ考得ざきど。其觀音ある寺々の傳説ゐ。花山法皇の順礼しゐひ世りしゐ始れりといまぞ。此法皇も形はぐしく佛法を信みゐひ。御私ゐ御位を捨て。大宮を忍出ゐひ。辱くも九人の如く出家といふ。ふ。ありて。修行して。諸國の寺々を拜巡りゐへる事。書どもゐ記せるゐ如く形きバ。然る御行せさせゐへるゐ。ゐもゐる法し。又此上皇より前ゐれりゐせさせゐまひて。同時ゐおもしまし。けるる圓融院上皇も。同じさおにものしゐへるゐと書どもゐ見えたる中ゐ。日本紀畧永延元年十月の條ゐ。圓融寺法皇修行南京巡礼諸寺と記せるをれもひ奉れバ。あの法皇のものし始めへるゐてもゐる法し。さて其三十三所觀音巡礼の

事の書ふ見えさるハ。塵嚢抄ハ。三十三所観音を挙載て。此記ハ久安六年庚午。長谷僧正叅詣之次第也。或夜長谷僧正ノ夢ニ於ニ琰魔王宮ニ日本ノ生身観音卅三所ヲ注セル記録ヲ見ルニ則今ノ日記也ト云々一度叅詣ノ輩ハ縦ヒ雖レ造ニ十悪五逆ヲ速ニ消滅シ永ク離レ悪趣ヲト云々。と記せり。千載集ハ。前大僧正覺忠。三十三所の観音をゞみ奉らむとて。所々まゐり侍りけるとて。美濃の谷汲ふて油の出るを見てよみ侍りける。世をてらしける佛の志るしありきバ。まゝとも火も消ぬあり。穴太の観音を見奉りて。見るまゝ。お涙ぞ和つる。限ひき命にかをるすゞきとおもへむ。と見えゝる覺忠ハ。いとゆる長谷僧正ハ。三十三所叅詣の時れ事ハ。尊卑分脈を案ふるハ。法性寺ハ合へり。さて其覺忠ハ。権僧正天台座主。号ニ長谷前大僧正ト治忠通公の子ハて。兼元年入滅六十歳。と見ゑ。應七年清水寺新建ル慈願寺。幹縁序ハ。日東之為レ俗也。帰ニ元吾佛者駿矣。而敬ニ観音大士ヲ為ニ之ヲ先ト也。院々設ニ其像ヲ云々。三十三所為ニ之ヲ最ト云々。國俗謂ニ之ヲ三十三所巡礼ト。洛陽清水寺其一也。といへる事見ゑ。まゝ太平記ハ大塔宮熊野落ち條ハ。三十三所巡礼ハ罷出さる山伏ども云々。又

弘治二年ふ作れる桂川地蔵記賀茂祭行装の文の中ふ。或有ニ三十三所順礼行者ヲ打レ簡ヲ。ど云へる詞も見えさり。さて其観音の在所ハ。具ハ拾芥抄。塵嚢抄等ハ見ゑさるゞ如くハて。今と少異ハり。さてそれ巡礼歌の詞ハ。拙劣ク鄙びて。さらに古歌の體ハもあらざれど。むげハ近世に作さりとも知あえば。元和二年ハ記せる太閤記ふ。伏見の境地を挙たる章に。僧喜撰ゞ住し宇治山も近くありて。世ハ捨て喜撰ゞ嶽とハひ傳ふあり。扨しあらびて三室戸と云ふ高山そびえつゝ。麓ハる寺院三十三所の順礼をうつ觀音堂あり。順礼歌とて。夜もすがら月をゝむろと明行て。宇治ハ川瀬ハさつた白波。とあり。此歌今の順礼歌と同

じ。但し今は三句を已けゆけば元和の比はやく耳かともうまふハ訛れるあり。
れまる趣ハ知ゆるをもて。餘の歌どもゝたわゝさ
准へ知るべし。さて其もとかゝ佛足跡のおとく。佛
前ゆく歌唱ふ事の傳たゝる寺ゝありけるゞ。其意を
得て。順礼する鄙人どもれ耳ちゝくきゝゆべく作ま
て詠をしゝ。ゝるゞ。然ゝ寺々のゆまねきまめしとゝ
ましものゝるべし。かくて其順礼歌うまふを。さゝゝ
心ゝゞ。てきゝゝるに。國々所々にてれのゞゝらい
きゝか曲節の異ありとゝゝゆるも交きゝゞ。おほゝ
まゝ風韻も相同じ。聲音ゝ哀蕩叫吟ゝるハ。もとより

以まま賤しゝ記きもゝ男女うち雑りまるゞ。一向ま佛を
信念ふ心ゝらひゝれゞ。然るゝ己が故郷の若狭
ゝれくゝまりまる山里ゝ中に。絲竹ゝ音をもゝ
ぬゞゝまゝるともがらゞ。賀事ゝ酒宴してかの順礼
歌うゝひ。手拍あげてゝらゝゝのそゞ。武蔵の片田舎。ま
ても然る慣ある處まそれ外國々ま
ゝりと聞およべし。或ゝ女ゝ臼歌ゝどにも歌ふとゝ
ゝゝりとそ。清輔朝臣の袋草紙ま。元慶ハ大山別當ゝ
そ時鳥いづまの門も同じうの花而上洛の時山崎辺
ゝおいて下女ゝ臼歌ま唱之元慶聞之拭涙といふる
あとゝゆ。れの まもよそながらほのきゝたる事もゝりけ
まど。よくも聞とゞ。ゝざりゝまゞ。然るゝゝの山里人

まのあぐり問へるふ。巡礼の時おそはあ孤。然らぬ時
う者ふまは。れのげかられもしろく歌をる〳〵もの形
ま。とおともなくあ〳〵へ者り紀。百人一首の中れ歌ま
む。発で〳〵かるぼきをといひ〳〵孤バ。然る歌をむえ知
り侍らばといらへ者りこそくちをしかりしか。
又お孤も若狭まて。れの者ぐ已う紀頃。年始まさ節供
おどいふ日ふ。ものもらひの瞽女ぐ二人三人法者
ち来て。門ま立て。君ぐ世々千世ふ八千世ふの歌を。言
賀ぎう〳〵ひ者るぐ。かの順礼歌の曲節まれおあさ同
じくきこ由れど。を可ものら発で者くあを者ま紀〳〵お
さ孤者りき。此比國人まを問ひきくふ。今ものさる古代形
る歌う〳〵ふ事いをさ〳〵きこえず。とこ

ろまつけていまめきたるかきの歌う〳〵へりと云へり。お孤らをれもひいかをせて。順礼歌ま古の歌れう者ひぶ可のの川〳〵も遺り者らむうとそいふ可る形う。此ちろしらひして猶諸國の偏田舎まてよく者づねたらむまは。さ〳〵に歌ひざ〳〵の遺可傳ち者るところのいりぬべきあり。さて今も志形者ら紀ま〳〵りまてい。歌会れ時ま披講とて。歌をや〳〵形ぐ発て讀いげ可へる事いりとほのうふ聞傳へ者孤ど。いうある故まうろ。れもれ秘事とし者まへりとい可ま可バ知る法れまあらば。おのれさ紀ふ下野の宇津宮ま行者るとき。手塚某ぐ蔵傳へ者る。永正聞書と題せる古紀寫巻を見者る中ま。歌の披講れ曲節の事を載

きるを抄出てあ〳〵に載さ。その題名の旁に朱にて言
れる所ありといへども。かゝる冷泉家の弟子の作
ざるを補ちむ為に書入と注せり。さて奥書に右の聞
書は。去永正十七年之夏。於防州山口御本所様御下向
御滞留中。受御家之説注之畢と記せり。按に防州山口
は。大内義隆朝臣の領地なり。此ぬしの招によりて。西
三條藤原実隆公山口に下向の事。記録どもに見えた
り。有職問答抄奥書に。此一冊。問は多々良義隆朝臣。答
は西三條逍遥院実隆公記之。と云ふる事もみえたり。
此聞書といへるは。実隆公の従者などの
山口にて。御説を聞書せるものなるべし。

一上畧 和歌ひらうのふしは。はうせのゐ初重は調子にあて
あうはのけ調子はきなくそくし。わうきよ
はうりきをうりうはなし

又二重のゐ

尺ゐまゐにやまうせあらくちくるゑ
そやこもいまや秋さむ形ゐら華

又別面雅経已来二重ゑる

ほのくと。はうしれうの。はさ形ゐ
ちまかく秋ゆくふをしそおりふ

右ひらうは自然一度は二度ゐるへくは是を秘

又て三重のゐ

ゐろ形みさきゑてゐやれけき
さりとて人のこのけやこゑねや

されは三重は乙調子にかへりは

一うゝと披講の次第なるゆゑにかうしゐて二重それより
星三重たてけうゝと二三ゑゐるゐて又乙よかうゝて
てをいゐゐ又果の一ゑゝまゝく三重のふゝに講ゝ来い
ゝゝゆゑてきうゝとを又おゝゝへゝ乙よ一返かうゝゝく
てをいゐされハ者人の夢あとハ二返かうゝ屋くい必
貴殿ゑゝくい又ゝ者人なゝの夢を二重の初三重乃
初おゐなゐゝと尤発変のんゆゑてい低下句はゝう三
重に講するゆも保畧義ゑてい次ゐ披講ゑつけ物の
楽いへとも調子大ゆの中ゆ来い下畧
とゆゝ。いま此披講の墨譜ゑ據りて。れゝゆてに唱試

むるふかの順礼歌の曲節ゑ似者うげふれもはゆく
ハ。あまりにおゝ河先るあゝろのゆゝふや。とゝりハれ
もふものから。ゆゑすてもゆらでおむ。